

イリヤ・レーピン 《イクスクルの肖像》 再評価への試論

——帝政末期ロシアの貴婦人と画家の交流——

早川 萌

はじめに

ロシアを代表する画家イリヤ・エフィーモヴィチ・レーピン（1844-1930）はロシア帝政末期からソヴィエト連邦初期にかけて活動し、大きく異なる両体制下で高く評価された。しかしレーピン研究が進められたのはソ連時代であり、未だに当時の美術史観は根強く残っている。帝政時代の人々を抑圧する側（皇帝や貴族）とされる側（民衆とその擁護者である文化人）に分け、《ヴォルガの船曳き》を筆頭にレーピンが専ら後者を描いたことが評価される中で¹、レーピンが描いた貴族の肖像画はしばしば無視されてきた²。《V.I. イクスクル・フォン・ヒルデンバント男爵夫人の肖像》（以下《イクスクルの肖像》）【図1】もそうした作品の一つである。本稿では画家レーピンとモデルのイクスクルの交流に注目し、当時のロシア美術におけるこの作品の位置付けを見直すことを試みた。

本稿で引用したロシア語の訳は筆者によるものであり、引用文中の中略は（…）、訳注を〔 〕で表した。和文の引用は旧漢字を新漢字に改め、仮名遣いは原文に従った。

1. 作品とそのモデル

1-1. 《イクスクルの肖像》とは

国立トレチャコフ美術館所蔵の《イクスクルの肖像》は独特な肖像画である。縦196.5cm、横71.7cmという細長いカンヴァスの形、画中の女性の真紅のブラウスと黒いスカートの色彩のコントラスト、光沢の抑えられた薄塗りの油彩表現は鋭利な印象を生み出している。この等身大の全身肖像画に描かれているのはワルワラ・イワーノヴナ・イクスクル・フォン・ヒルデンバント男爵夫人（以下イクスクル）である。貴族女性の全身肖像画に相应しく、原色の服や目につく位置に描かれた左手の装飾品は華やかであるが、背景は地味で表情に喜色はみられな

い。肖像画でありながら口元を除く顔の大部分は黒いベールに覆われ、ベール越しに見えるモデルの視線はひときわ強く、表情は謎めいている。

この肖像画の先行研究を概観しよう。本作品は従来完成度の高さが評価されてきたが、詳細な作品解説は国立トレチャコフ美術館の収蔵品カタログ³と、グリゴリー・ユリエヴィチ・ステルニンによるカタログ『イリヤ・レーピン』⁴の解説（ともにロシア語）、日本で刊行された展覧会カタログ『国立トレチャコフ美術館所蔵 レーピン展』⁵の作品解説（日本語）のみである。最も新しい『国立トレチャコフ美術館所蔵 レーピン展』所収のリュボーフィ・ザハレンコワによる解説はイクスクルの衣装の特異性に言及した画期的なものであるが、彼女がそのような姿で肖像画に描かれることがどのような意味を持つのか、なぜそのような格好をしているのかは十分には説明されていないのが現状である。エリザベス・ヴァルケニアは、イクスクルの肖像画には親しさがないと評した上で、続く1890年代のレーピンがこうした高額の値段が約束されている社交界の人士の肖像画を描いて評判を高めたと、『イクスクルの肖像』の制作動機を経済的要因と名誉欲に帰している⁶。溝渕園子は1870年代から1890年代の絵画に旧来の女性像が利用されていることを指摘し、文学において示された新しい女性像と絵画において示された女性像の性質を比較して「この時期の「移動展派」の絵画では、文学ジャンルでそうであったほどに、新しい女性像の創造は認められない。」⁷と言い切っているが、溝渕論文で取り上げられていない『イクスクルの肖像』はこの指摘の例外となる重要な絵画である。

こうした先行研究に対し、レーピンや関係者の書簡や回想からは異なった制作の経緯や受容のあり方が見えてくる。『イクスクルの肖像』の制作時期はこれまで画中の年記に基づいて1889年とされてきたが、レーピンと懇意の作家アレクサンドル・ヴラディミロヴィチ・ジルケーヴィチの日記には、1888年9月30日にレーピンがこの作品を描き始めたばかりだったことが書かれている⁸。1889年に完成した肖像画は『V.I. イクスクル男爵夫人の肖像』のタイトルで1890年の移動展覧会⁹に出品されて1891年にトレチャコフが購入し、以後今に至るまでトレチャコフ美術館で所蔵されている¹⁰。

購入の経緯はレーピンがトレチャコフへ宛てた書簡から知ることができる。『イクスクルの肖像』が公開された第18回移動展（第1会場はペテルブルク、2月11日-3月20日）¹¹の会期中である1890年3月16日にレーピンはトレチャコフに宛てて次のように書いている。

男爵夫人はあんなに有名なギャラリーに自分の肖像画が並べられるという考えに夢心地にさえなりました。このことに際して彼女は私があなた [=トレチャコフ] から肖像画代として大金の山を受け取るものと思っているようで、気を利かせて〔絵を〕譲ってくれました。彼女は自分のための肖像画をもう一枚描くという言葉を私から取ったも同然でした。もしかすると、いつか描くこともあるかもしれません。彼女は面白いモデルですし、彫刻のようにポーズを決めるのです。

あなたのために、男爵夫人の肖像画の代金を半値にしました —— つまり、3000 ルーブルです。これ以上の値引きはできません。

Баронесса пришла даже в восхищение от мысли, что портрет ее будет в такой знаменитой галерее. При этом мне показалось, она воображает, что я возьму с Вас горы золота за портрет, и она деликатно уступает. С меня она взяла почти слово написать для нее другой портрет. Может быть, и напишу когда-нибудь: она – модель интересная и позирует, как статуя.

Для Вас я назначаю за портр[ет] бар[онессы] половинную плату – т. е. 3 т[ысячи] р.; уступки никакой сделаю.¹²

この記述からは、レーピンはイクスクルから肖像画を注文され、移動展でこの肖像画に注目したトレチャコフがレーピンに作品の購入を打診してレーピンとイクスクルが相談した結果、肖像画の持ち主であるイクスクルが肖像画をレーピンに譲って代わりにもう一枚描かせることにしたという状況が読み取れる。レーピンの言葉通りなら、当初イクスクルが注文した時の肖像画の代金は6000ルーブルだったようだが、レーピンがこれ以降、これほど高額な《イクスクルの肖像》の代わりとなるような大作のイクスクルの肖像画を描いた形跡はみられない。

《イクスクルの肖像》への評価は発表直後から高いものであった。1890年の第18回移動展覧会に出品されたレーピンの作品は1点だけだったこともあり、この作品は注目を集めた。2月11日に始まった移動展のペテルブルク会場(第1会場)の様子は新聞『モスクワ報知』の移動展覧会評の中で取り上げられ、レーピンの作品の中では異色のものながら「展覧会における最良の肖像画」¹³であり「この肖像画はレーピン氏のもっとも見事で訴える力のある肖像画の一つ」¹⁴と絶賛された。『ペテルブルク新聞』も同様に、この時の移動展における優れた作品の筆頭に《イクスクルの肖像》を挙げている¹⁵。イクスクルもこの作品とその反響には満足していたようである¹⁶。また、同時代の画家ミハイル・ワシーリエヴィチ・

ネステロフ¹⁷もこの肖像画を高く評価して、回想録で次のように述べている。

それはレーピンの才能の最盛期であった。(…)ともかくも、私達はその時イリヤ・エフィーモヴィチの新たな傑作に魅了され、私はこの肖像画によってイクスクル男爵夫人の存在を初めて知ったのだった。それ以降だんだん頻繁に彼女の名前に出くわすようになった。

Это было время самого расцвета таланта Репина. (...) Во всяком случае, мы тогда были в восхищении от нового шедевра Ильи Ефимовича, и я впервые по этому портрету узнал о существовании баронессы Иксукуль. С тех пор чаще и чаще я стал встречаться с ее именем.¹⁸

この言葉からは、肖像画が公開された段階ではイクスクルの名がペテルブルクの人々に浸透しておらず、移動展に展示されたこの肖像画がイクスクルの名と外見を宣伝する役割を果たしていたことが分かる。

なおイクスクルの肖像のうち、現存するのはレーピンが第18回移動展に出品した《イクスクルの肖像》と肖像写真【図2】のみである¹⁹。これ以外にもレーピンはイクスクルの肖像画を描いていたようだが、作品情報は僅かで図版を確認することはできない²⁰。

1-2. イクスクルとは

肖像画のモデルであるイクスクルの人となりは長年にわたり埋没しており、その生涯が明らかになったのは、ヴェーラ・ボコワによる伝記「イクスクル男爵夫人」²¹が出版された1991年であった。この伝記は、裏付けのない情報を多く含んでいるという問題点はあるが、彼女の唯一の伝記として参照されている。以下のイクスクルの経歴および活動については前掲「イクスクル男爵夫人」による。

イクスクルは1850年代前半に生まれ²²、父イワン・セルゲーヴィチ・ルトコフスキー将軍はペテルブルク総督であり、母マリヤ・アレクセーエヴナ(旧姓シュテリチ)はセルビアに起源を持つ貴族という名門の家柄だった。彼女の幼年時代は明らかではないが、16歳で外交官ニコライ・ドミトリエヴィチ・グリーンカと結婚し、結婚後はドイツ、イタリア、フランスといった外国で過ごし、美貌²³と内面的な魅力によって各国の社交界で名を知られることとなった。夫グリーンカとの間には子もいたが、離婚して元夫グリーンカの上司でローマ駐在公使のカルル・ペトロヴィチ・イクスクル・フォン・ヒルデンバント男爵と再婚した。1880年代に

はルスラン（Rouslane）のペンネームで文筆活動を行っていたが、作品は失われている。1884年にグリーンカが没したことで彼の領地がワルワーラ・イクスクルの息子に相続されることになることになると、ロシア国内での用事が増え、1891年に夫のカルル・イクスクルが退職すると本格的に生活の場をロシアに移した。

イクスクルはペテルブルクでサロンを開き、優れた人間観察の目で突出した人物や将来有望な人物を集め、気に入った人には交友関係の広さを活かして必要な人物を紹介した。イクスクルのサロンは文学サロンであったが、サロンに招かれる人の多様さは他に類を見ないもので、ペテルブルクにいる有名人は悉く彼女のサロンに招かれ、イクスクルのサロンは彼女自身の魅力に加えて話題の人物と知遇を得る場として人々を引き寄せた²⁴。

サロンでの人助けは顔つなぎから次第に規模を拡大し、政府関係者へのコネクションと資金を用いた慈善活動に発展した。イクスクルの活動の中で特に重要なものに、女子高等教育運動への貢献²⁵と戦時の医療活動への参加²⁶、後述する村の人間のための本の出版・啓蒙活動がある。また、イクスクルは自分を頼る人間に対しては必ず何らかの形で支援したため、彼女の慈善活動の対象にはマイノリティや反体制的な人物も含まれることとなった²⁷。上流社会には彼女の交友関係の階層の広さや彼女の分け隔てのなさや軽蔑する者もいたが、同時代の社会全体での評価は高いものであった。

1917年にロシアで革命が起きると、近衛士官の母であるイクスクルは反革命側の人間とみなされて拘束を受けた。1921年の暮に亡命し、1922年以降はパリで生活した。パリではかつての社交界での知人や亡命ロシア人と共に余生を過ごし、1928年2月20日に生涯を閉じパティニョールの墓地に葬られた。

2. レーピンとイクスクルの交流

レーピンとイクスクルが知り合った経緯は明らかではないが、二人の交流を示す資料の中で最も古いのはレーピンからヴラディミル・グリゴリエヴィチ・チェルトコフ²⁸宛てた1888年2月16日の書簡の記述である²⁹。そこにはイクスクルのサロンの感想が書かれており、レーピンとイクスクルが知り合ったのはそれ以前、つまり1880年代半ばにイクスクルがレーピンの家の近くに移って数年以内であった³⁰。当時レーピンは既に有名であり、イクスクルがサロンを開いてすぐにレーピンを招待したと考えられる。同年9月には《イクスクルの肖像》の制作が始まっており、《イクスクルの肖像》が描かれたのは、レーピンとイクスクルが知り合って間もない頃だったということになる。

レーピンは《イクスクルの肖像》や後述するイクスクルの出版活動への挿絵提供、一連のサロン人士のスケッチなどイクスクルのサロンでの出会いを制作に近づけていたが、1890年代のレーピンの書簡からは、絵を通じた交流にとどまらないサロンへの参加の様子が見えてくる。レーピンはイクスクルのサロンの読書会や講義に参加してだけでなく、イクスクルの別荘での食事会に出席し、イクスクルの邸宅のホールで上演されるオペラを見に行った³¹。また、レーピンはトルストイの作品を好むイクスクルのためにトルストイと親しいチェルトコフをイクスクルに紹介し³²、知人フォファノフのために住処の提供者としてイクスクルを紹介している³³。知人とイクスクルを引き合わせようとするレーピンは、ただサロンに足を運ぶだけの客とは異なり、才能ある者と知り合いになろうとするイクスクルの意図を理解して彼女に協力している。

イクスクルの活動にレーピンが協力した他の例として、挿絵の提供がある。イクスクル自身の著述によると、彼女は村を訪れた時に村の住民に読み物が不足していることを実感し、村人に向けて知識獲得や精神涵養のための本を出版することを思い立った³⁴。彼女の広い人脈がこの試みを支え、ヴラディミール・ガラクティノヴィチ・コロレンコ、グレープ・イワノヴィチ・ウスペンスキー等の親しい作家は無報酬で自作品を提供し、他にもツルゲーネフやドストエフスキー等の作品も含めた64タイトルがモスクワのイワン・ドミトリエヴィチ・スィチンの出版社から刊行され、レーピンはこの本にカバー挿絵を提供した³⁵。作家アントン・パヴロヴィチ・チェーホフによると、イクスクルが企画した本には「真実 Правда」という飾り印が入り、1冊の値段は3-5コペイカであった³⁶。イクスクルの人脈の精華であり、レーピンの画業の一部でもあるこの本は、発行の経緯や本の装丁まで分かっているものの、現在この本の実物は確認できず、先行研究にも本そのものを実見したと思われる記述はない。

レーピンはイクスクルの他にもエリザヴェータ・グリゴリエヴナ・マーモントワ³⁷やマリヤ・クラヴディエヴナ・テニシェワ公爵夫人³⁸といった上流婦人と交流していたが、回想録『遠きこと近きこと』(Далекое близкое)の中で交流の様子を述べているのはイクスクルについてである。

ついでにワルワラ・イワーノヴナ・イクスクル男爵夫人宅でヴラディミール・ソロヴィヨフの内輪の講義までもがあったことを話さねばならない。そこにはごく稀にではあったが、V.S. ソロヴィヨフも訪れ、こうしたアラルチン橋の傍の集まりではある時講義が行われたこともあったのである。

ワルワラ・イワーノヴナは非常に気働きの利く女主人で、私がいつも黙って聞いてばかりいる（私は四十余りだがお利口な子供であった）のに気付いて、私にスケッチブックと鉛筆を持たせた。私はすぐにこの立場に慣れてしまい、ゆったり座って誰かを描いた。そんな風にして、私は何度も描き、この木曜日ごとの集まりの出席者の色々なあだ名で呼ばれたほぼ全員を描いた。そしてこのスケッチブックの存在はいまだに誰にも知られていない。VI. イクスクルはそのスケッチブックを出版しなかった。「赤十字」の慈善家達にも与えなかった。V.S. ソロヴィヨフは私に2度描かれた（講義の様子と普通の肖像画）。しかし、なんと奇妙なことか、あの時男爵夫人の豪華なサロンでヴラディミル・セルゲイヴィチ [・ソロヴィヨフ] が何について話したのか一言も思い出せない。スケッチブックと鉛筆は多分何も耳に入らないほどに私を夢中にさせたのだろう。（...）

その場所で会えない人などいただろうか！そして、しばしば最も対極の人にも会えた。大学生にも女学生にも、—— また、彼等はいつも満足していたが、魅力的な女主人には特に満足していたのだ！

Надо заодно рассказать, что была еще лекция Владимира Соловьева, домашняя, у баронессы Варвары Ивановны Иксуль. Там и В. С. Соловьев тоже бывал, хотя и очень редко, на этих ассамблеях у Аларчина моста, и даже читал однажды лекцию.

Варвара Ивановна как опытная хозяйка, заметив, что я все молчу и только слушаю (я был умный ребенок и в сорок с лишним лет), подсунула мне альбом и карандаш. Я быстро освоился с положением: усевшись, я рисовал кого-нибудь. Таким образом, я перерисовал почти всех переименованных посетителей сих четвергов, и этот альбом еще неизвестен никому. В. И. Иксуль не пускает его в издания. Отказывает даже благотворителям и благотворительницам «Красного креста». В. С. Соловьев нарисован мною жва раза (за лекцией и просто портретом). Но как странно: сейчас я не могу ни одним словом вспомнить, о чем читал тогда в великолепном салоне баронессы Владимир Сергеевич. Альбом и карандаш поглотили, вероятно, меня настолько, что я ничего не слышал. (...)

Кого только не встречал я там! И часто людей самых противоположных полюсов. И студентов и курсисток – и все они так бывали довольны, особенно очаровательную хозяйкою! ³⁹

この引用には、スケッチに熱中するあまり講義の内容を覚えていないというレーピンの画家らしい一面が表れており、またレーピンの作品に関わる記述も含まれている。

レーピンが強調しているように、イクスクルのサロンに招かれたのは作家、画家、医者、学者、弁護士、貴族、将校、政治家等、幅広い分野の間人であったが、彼等はみな成功者や有望株であった⁴⁰。レーピンがイクスクルのサロンで描いた著名人のスケッチはイクスクルの貴重なコレクションとなった。イクスクルはこのスケッチを他人に見せようとせず⁴¹、彼女にとってこのスケッチは私的な価値を持つものだったようである。描き手であるレーピンも1925年に書簡の中でイクスクルのもとにある自身のスケッチを面白いものだと述べ、彼女の秘蔵のコレクションの一部をイサーク・イズライレヴィチ・プロツキー⁴²が手に入れたことを伝えている⁴³。レーピンの死後にもP. ドゥリスキーが論文の中でプロツキーのコレクションに含まれるイクスクルのコレクションに言及し、1890年代から1900年代にかけてV.I. イクスクルのもとに出入りした著名人の最も価値ある肖像画連作として高く評価している⁴⁴。現在この連作の所蔵はレーピンの家博物館「ペナーティ」、プロツキーの家博物館、国立トレチャコフ美術館、国立ロシア美術館に分散しており⁴⁵、全貌は未だ明らかになっていない。現在作品情報が判明している作品には、《V.S. ソロヴィヨフの肖像》(34.5×23.8cm)【図3】、《I.N. ポタペンコの肖像》(34.5×24.2cm)【図4】、《N.A. ヴェリヤミノフの肖像》(34.5×24.2cm)【図5】、それに《ワルワーラ・イワーノヴナ・イクスクル・フォン・ヒルデンバント男爵夫人のサロンでの講義のV.S. ソロヴィヨフ》(23.2×33.5cm)【図6】がある。これらのスケッチのサイズは全てほぼ同じ大きさである。このことから、《V.S. ソロヴィヨフの肖像》⁴⁶と《N.A. ヴェリヤミノフの肖像》⁴⁷では制作時期に2年の開きがあるとはいえ、同じスケッチブックを使った同一規格の肖像画連作と考えられる。

レーピンの回想録以外にイクスクルのサロンの様子を今に伝える資料として、レーピンによるスケッチ《ワルワーラ・イワーノヴナ・イクスクル・フォン・ヒルデンバント男爵夫人のサロンでの講義のV.S. ソロヴィヨフ》があり、ネステロフは文章によって流行に敏感なイクスクルのサロンの様子を書き残している⁴⁸。粗い筆致で描かれたスケッチ《ワルワーラ・イワーノヴナ・イクスクル・フォン・ヒルデンバント男爵夫人のサロンでの講義のV.S. ソロヴィヨフ》には先に引いたレーピンの回想を彷彿させるソロヴィヨフの講義の様子が描かれている。このス

ケッチで背景はとりわけ粗く描かれているが、画面中央部には比較的細かく縦長の大型の肖像画らしきものが描き込まれており【図7】、《イクスクルの肖像》と作品の形や大きさ、画中の人物の尖った帽子に類似が認められる。スケッチの制作年代は1890年代とされており⁴⁹、《イクスクルの肖像》は1890年の移動展に出品された後1891年に画家から直接トレチャコフに買い取られたことになっているが⁵⁰、1889年に絵が完成した後、1890年の移動展への出品作品の提出期限（同年2月3日）⁵¹までのごく短い期間に当初の注文主であるイクスクルのサロンにこの絵があった可能性がある。《ワルワーラ・イワーノヴナ・イクスクル・フォン・ヒルデンバント男爵夫人のサロンでの講義のV.S. ソロヴィヨフ》はソロヴィヨフの講義の様子を描いたスケッチであるが、ソロヴィヨフは後ろ姿しか描かれていない。これは描きたいものがソロヴィヨフの姿以外にもあったためだと考えられるが、ソロヴィヨフに向かい合う形で正面を向く聴衆はいずれも簡略化された姿で描かれ、その中で画面中央付近にやや丁寧に肖像画が描かれている。もしこのスケッチに描き込まれた肖像画が《イクスクルの肖像》であるなら、このスケッチの制作年代は上で述べた短い期間に絞られることになる。

レーピンが「非常に気働きの利く」⁵²と評し、初対面のネステロフとすぐに打ち解けた⁵³イクスクルの人あたりの良さは、《イクスクルの肖像》に描かれた冷厳なイクスクルの立ち姿とは結びつかない。《イクスクルの肖像》に描かれたイクスクルの近寄りたさは、大型の全身肖像画という形式や彼女の装飾品と相まって特徴的な女王然とした雰囲気を出しているが、これは演出効果を狙ってイクスクルの実際の姿を歪めて描いたという訳ではない。イクスクルが「彫刻のようにポーズを決める」⁵⁴というレーピンの言葉からは彼女が実際に堂々とした立ち姿を見せた様子が窺え、更には内面的にも《イクスクルの肖像》はイクスクルのある面を捉えていたようである。

それにしてもあなたがイクスクル男爵夫人のことをセンスが無いと思っていたのにはたいそう驚かされました。だが、まあ、あなたは多分正しいのでしょう。私は彼女を深く知ったことは決してありませんが、あなたは正しい感覚を持っていると思っています。彼女には厳しい、硬い、割り切ったところがあるに違いありません……すみません、こんな無粋なことを。——彼女の事は、なにしろ皆がセンスのお手本、優雅さのお手本のように思っていますから。なるほど、彼女の服装や化粧はセンスが無いわけではなく、彼女が家に備え付けているものは月並みなものではなく、優雅さに欠けるというこ

とはありません。しかし彼女は、見かけは楽しそうなのにもかかわらず、中身がないのです。

Но Вы меня очень удивили, что находите б-су Иксукуль безвкусной!.. А впрочем, Вы правы, вероятно, хотя я ее никогда не ел, но думаю, что у Вас верное чутье, у нее должно быть жесткое, твердое мясо, сухое... Простите за это дикое остроумие – ее ведь все считают образцом вкуса, изящества. Правда, она одевается и гримируется не без вкуса и обставлено у нее дома не ordinarily, не без изящества. Но она пуста, несмотря на приятную наружность.⁵⁵

レーピンが1892年1月24日から25日頃にタチヤナ・リヴォヴナ・トルスタヤ⁵⁶に宛てた書簡の中で洩らしたこのイクスкуль評は、先に引用した回想録でのイクスкуль評とも、他の人物によるイクスкульの思い出とも異質なものである。ここでレーピンは、多くの人にとって柔和な女性であるイクスкульに、別の一面を見出している。

留意すべきは、このイクスкуль評はトルスタヤが先にイクスкульに否定的な意見を述べたという文脈で書かれたということである。引用部分でトルスタヤに同調しているレーピンは、同年3月以降トルスタヤが一転してイクスкульに好意的になると、イクスкульの近況をトルスタヤに伝えるようになった⁵⁷。こうした応答を踏まえると、トルスタヤ宛書簡で述べられたイクスкуль評を以てレーピンがイクスкульを嫌っていたと断定することは難しい。このイクスкуль評の後にもレーピンは画家としての仕事と関係なくイクスкульの家に入出入りしていることから、イクスкульの内面への不満はそれほど大きなものではなかったと考えられる。また、多くの人がイクスкульを柔和な女性だと思っていただけでなく、普段のイクスкульが親しみやすい女性であったことはレーピン自身も回想録で認めていることである。

レーピンがこのイクスкуль評を書いたのは《イクスкульの肖像》制作後であるが、そこに表されている硬質さは《イクスкульの肖像》に描かれたイクスкульの近寄りがたさと正に同質のものである。また、レーピンの感じたイクスкульの中身のなさとは、イクスкульのバランス感覚の良さと表裏一体のものでもある。革命家から皇后まで幅広い人脈を持ち、気に入った相手であれば誰にでも接近するイクスкульの人付き合いの良さは、見方によっては無節操なものに見えてしまう可能性を秘めている。このバランス感覚は、後述するイクスкульの折衷的な服装にも表れている。多くの人が見過ごすイクスкульの一面を捉えたのはレーピンの

鋭い人間観察の眼であり、厳しさや硬さのある、いわば強い女性の姿を大型の全身肖像画という形式と調和させた点に肖像画家としてのレーピンの力量が遺憾なく発揮されている。

3. 当時の文脈から見えるもの

3-1. ガリバルディイカ

イクスクルが肖像画中で着ている服装は、キルサノワによる服飾辞典『18-20世紀初頭のロシア芸術文化における服装 百科事典の試み』⁵⁸でガリバルディイカ (Гальбардийка) として紹介されている。それによると、ガリバルディイカは折り襟、長袖で胸にボタンとボタンに沿った襷があるベルト付きの女性用ブラウスで、名称はイタリア解放運動のリーダーであるジュゼッペ・ガリバルディに因む。ガリバルディの赤シャツ隊に因んだ女性用ブラウスは西欧では1850年頃に *camica rossa* (赤いシャツ) の名で流行していたが、ロシアのガリバルディイカは特定の形状のブラウスを指し、赤いものが好まれながらも様々な色のブラウスがガリバルディイカと呼ばれた。

ロシア国内でのガリバルディイカの流行は1860年代から始まったとされる。最初にガリバルディイカを着始めたのは高等教育機関で教育を受ける女性達だった。ガリバルディイカに黒いスカートという質素な服装の組み合わせは一部の若い女性の奇抜な服装として文学作品に取り上げられ、しばしば年長者からは反発を受けた⁵⁹。その後ガリバルディイカの着用は女学生から女学生を支援する貴族女性に広がったが、民主主義への理解を示す服装であり続けた。キルサノワの解説から浮かび上がるのは、ガリバルディイカは民主主義という政治的主張を纏い、女子への高等教育の問題と結びついた服装だったということである。

《イクスクルの肖像》は、イクスクルが高い費用をかけて注文した肖像画であるため、彼女の服装は考え抜かれた特別なもののはずである。この肖像画でイクスクルが着ている赤いブラウスはガリバルディイカであり⁶⁰、ガリバルディイカは女学生が好んで着て街中を歩いていた外出着であるが、イクスクルについての回想や、同時代の書簡や日記の中にイクスクルがガリバルディイカを着ていたことを示す記述はない。

イクスクルの服装を書き残しているネステロフは、1907年に展覧会場で初めてイクスクルに会った時の印象を「純粹に視覚的な」⁶¹もので、「全身黒づくめで、どんな装飾品も余計なものは何も身に付けていなかった」⁶²としている。またイクスクルは第1次世界大戦中に病院創設業務に忙殺されている時に、監督してい

るカウフマン看護婦会の看護婦達に包帯を思わせる白い頭飾りをつけさせており⁶³、服装の見た目には高い関心を寄せていたようである。《イクスクルの肖像》に描かれたイクスクルの格好は赤と黒の鮮やかなコントラストにベールを着けたままという独特なものだが、視覚的なインパクトを与え自分の社会参与を宣伝することは彼女のファッションの方針に則ったものであり、その意味で、描かれた装いは非常に「イクスクルらしい」ものであるといえるだろう。イクスクルが実際にこの服装を着ていたかという問題よりも、ガリバルディイカを着た姿の肖像を作らせ、人に見せることの意味にこそ注目すべきである。

赤い絹のガリバルディイカに黒いレースのスカートを合わせたイクスクルの姿は彼女の持ち前のスタイルの良さを強調するとともに、社会的なメッセージを発するものでもあった。彼女の服装は女学生の服にしては贅沢な素材を使っているが、服の種類に注目すれば、ガリバルディイカとスカートという服装は彼女が支援する女学生と同じである。一方で、特徴的な高い帽子と黒いチュールのベールは1880年代後半に流行した婦人の服装にみられるものであり⁶⁴、ニヒリストウカと呼ばれた当時の女学生の被る丸帽子⁶⁵とは明らかに異なっている。高級な素材と華やかな色、プレスレット等の装飾品により裕福な貴族層の一員であることを示しつつ、服の形の類似によって女学生への共感を示す折衷的な服装には、多様な人間と交際したイクスクルならではのバランス感覚が表れているといえる。また、女子医学課程再開だけでなく、反動的なアレクサンドル3世の統治下で閉鎖の危機にあったバストゥージェフ女子大学の存続を請願活動により1889年に回避したイクスクルにとって⁶⁶、ガリバルディイカは正に肖像画制作時期に自分が従事し成果を上げていた活動を表現する服装でもあった。

レーピンの方でも女性の衣装の美しさは長年にわたり魅力を感じた重要な要素であった。レーピンは着飾った女性の美に強い魅力を感じており⁶⁷、自分の服装がどのように見られるかに注意を払うイクスクルの感覚はレーピンの興味と重なる部分を持っていたはずである。興味だけでなく、服装の多様な質感を描き分けることは画家としての技量を示すことにもなり、《イクスクルの肖像》のイクスクルはレーピンにとって理想的なモデルであったといえる。

キルサノワは絵画に描かれたガリバルディイカの例として、《イクスクルの肖像》以外にニコライ・アレクサンドロヴィチ・ヤロシエンコの《女学生》【図8】を挙げている⁶⁸。画中の女学生が着ているブラウスは長袖で白い折り襟があり、前身頃に縦に襷が取られウエストがベルトで絞られていることから、確かにガリバルディイカの特徴を満たしているが、イクスクルの服装とは大きく趣を異にし

ている。

イクスクルが着ている鮮やかな色のガリバルディイカは上質な素材が使われており、体型に合わせて仕立てられ、袖口や裾には装飾が施されている。一方、女学生が着ているガリバルディイカは地味といえるほどに質素である。暗い色のガリバルディイカに特別な装飾はなく、唯一目立っているのは清潔感のある白い襟のみである。《イクスクルの肖像》と《女学生》の比較からは、イクスクルが衣装によって伝えようとしていた己のイメージが明確に浮かび上がってくる。イクスクルは、女学生が着るガリバルディイカを着て女学生を支援する自らの立場を明らかにするとともに、素材や仕立ての違いによって自分のガリバルディイカを女学生のものとは一線を画する贅沢な服装にしている。小物や装飾品を見れば、イクスクルの装いは彼女が上流階級に属することを明瞭に表している。

3-2. 新しい女性像

ガリバルディイカの帯びる政治性を考えると、《イクスクルの肖像》はイクスクルというひとりの女性の姿であるのと同時に、そこにはこの時代の新しい女性のイメージも重ねて見ることができる。ニコライ・ガヴリーロヴィチ・チェルヌイシェフスキーの小説『何をなすべきか』⁶⁹の登場人物ヴェーラは結婚や労働について従来の価値観に縛られず、自分の人生と社会をよりよくするために自ら考え行動する新しい女性である。この新しい女性像は、再婚を経験し、女子高等教育運動に参加し、戦時には自ら前線に赴き看護にあたり、慈善活動を惜しまなかったイクスクルの姿と重なる。しかし、《イクスクルの肖像》に描かれたイクスクルの姿に新しい活動的な女性像を見出せるのは文学作品の登場人物との類似においてだけではない。絵画の表現においても、《イクスクルの肖像》の女性像は新しいものであった。

溝淵園子は1870年代から1890年代前半の移動派の肖像画に表された女性像を、柔らかく優しい母性や自然、忍耐といった既存の「よき女性」像だったとしているが⁷⁰、《イクスクルの肖像》はこれと正反対の、強さを感じさせる女性像である。描かれるのは優しそうな女性ばかりだった状況下で、多くの人知らないイクスクルの意外な一面を捉え、それまでにない女性肖像画に仕立てた《イクスクルの肖像》は、絵画における新しい女性像の一例といえる。

イクスクルが彫像のようにポーズを決める興味深いモデルであることは《イクスクルの肖像》の売却の話題が出た際にレーピンがトレチャコフに伝えたことであり、イクスクル自身が《イクスクルの肖像》に満足していることから、レー

ピンが描いた強い女性としてのイクスクルの表現はモデルの意向に沿ったものであり、決してレーピンが一方的に新しい女性像をイクスクルに被せた結果ではないことが分かる。《イクスクルの肖像》に真の愛情がないというリャスコフスカヤの評価⁷¹はこの肖像の冷やかさを一因としていると考えられるが、レーピンはイクスクルと親しく接する中で、他の人ならば肖像画に描かないであろうイクスクルの強い女性としての一面を掬いあげて《イクスクルの肖像》を描いたのであり、この肖像画の冷たい印象は愛情の欠如によるのではなく、モデルへの興味と女性を描く際の新たな表現への挑戦の結果である。

肖像画以外のジャンルも含めると、既存の「よき女性」像と異なる女性を描いたといえる作品は少ないながらも存在する。ガリーナ・チュラクによれば、イヴァン・ニコラエヴィチ・クラムスコイの《見知らぬ女》【図9】はモデルが不明で、実在の人物や文学作品の登場人物など様々な人物がモデルではないかと推測されてきたが、いずれにせよ当時の社会の慣行に挑戦した人物がこの絵の女性に重ね合わせられたとされる⁷²。1883年に制作され、1883年の第11回移動展（ペテルブルク会場、モスクワ会場）と1887年のクラムスコイの個展（ペテルブルク）に展示されていたことから⁷³、レーピンが《イクスクルの肖像》に取りかかる前にこの作品を見ていた可能性は非常に高い。

《見知らぬ女》は白く煙る街並みを背景に、馬車に乗った黒衣の女性を描いている。この女性の姿は「堂々として浅黒く半ばジブシーのような美しさ」⁷⁵と評されており、黒髪黒目で彫りの深い顔立ちや、鑑賞者を見下ろすような目つきは確かに《イクスクルの肖像》に通じる部分がある。イクスクルとクラムスコイの両者と親しかったレーピンが《見知らぬ女》のモデルを知らないと述べており⁷⁶、《見知らぬ女》の制作時期はイクスクルがロシアに活動拠点を移す前から、《見知らぬ女》のモデルがイクスクルだったということは考えにくい。しかしモデルが別人であっても、自然との結びつきや母性を強調するような既存の女性像とは異なる新しい女性像を描いているという点において、《イクスクルの肖像》は《見知らぬ女》の系譜に位置付けることができる。

新しい女性像を描いたという共通点がある一方で、《イクスクルの肖像》と《見知らぬ女》の女性像の新しさには異質な部分もあった。チュラクは「彼女の全てが、約束事や厳格な行動基準に縛られ乙にすましたサンクトペテルブルグへの挑戦であり対決である。彼女は上流階級には属していない、日陰の世界の女なのである。」⁷⁷と述べ、作品が纏う道德的逸脱の雰囲気はトレチャコフには受け入れられなかったとしている⁷⁸。《見知らぬ女》と《イクスクルの肖像》は共に新しい

女性像を描いているが、描かれた女性の立場には違いがあり、当時のコレクターであるトレチャコフの趣味に合ったのは後者であった。

4. 文脈を越えるもの

《イクスクルの肖像》の特徴的なイクスクルの威厳ある姿はその当時の新しい女性の姿を描いたものであり、ガリバルディイカの意味は時代や地域を超えて伝わるものではないが、この作品は同時代のロシアの人々だけに愛好された内輪向けの作品ではない。それは、日本人が残したこの肖像画への初の批評から分かる。1913年にモスクワを訪れた画家の石井柏亭はトレチャコフ美術館を訪れてレーピンを含む様々な画家の作品を鑑賞し、次のように述べている⁷⁹。

第八室に至つてつひに御大将レピンの諸作に逢着した。彼れが近代露西亜絵画史上如何に重きをなして居るかはあまりに顕著な事実で特に曰ふまでもない。彼れの制作の範囲は実に多面であつて、歴史人物肖像のあらゆるものに及んで居る。(…)而して嗜好から云ふときは予は後者即ち単純な肖像画の類を以て彼れの組立画⁸⁰よりも上位に置きたいのである。(…)

作曲家ムソルグスキー、トルストイ伯等、知名の士の肖像も可いと思つたが、予は特に赤と黒との衣装に於けるイクスキュール男爵夫人の立像や、レピン自身の令嬢の習作等を好んだ。⁸¹

ここでは《イクスクルの肖像》は「知名の士の肖像」と対置され、知らない人物の肖像として柏亭の興味を惹いている。肖像画を見る際には、しばしば描かれている人物が誰かということに意識が集中しがちであるが、見知らぬ人物の肖像であっても鑑賞者に優れた作品だと思わせるところに、《イクスクルの肖像》が普遍的に発揮する魅力がある。

おわりに

ソ連時代にレーピンの研究が進められると、先行研究のように《イクスクルの肖像》は技術の高さこそ認められたものの賃仕事という扱いを受け、同時代評とは異なる低い評価を受けることになった。また研究の場だけではなく展示の場でも、作品タイトルの変更によりレーピンと貴族の交流は鑑賞者に意識されないようになっていた。

タイトルの変遷に注目しよう。レーピンが書簡で《イクスクルの肖像》に言及

する際に「男爵夫人」の肩書が省かれたことはなく、第18回移動展でも《V.I. イクスクル男爵夫人の肖像 Портрет баронессы В.И. Икскуль》というタイトルで公開されていたが⁸²、1936年のレーピン回顧展のカタログではタイトルが《V.I. イクスクルの肖像 Портрет В.И. Икскуль》となっている⁸³。他の人物の肖像画が《作家 L.N. トルストイの肖像 Портрет писателя Л.Н.Толстого》⁸⁴のように職業と名前を併記する形式なのに対し、彼女の肖像画のタイトルは名前しか明かされず、身分や業績は伏せられている。変更されたタイトルは2006年に発行されたトレチャコフ美術館の最新の収蔵品カタログでは、《V.I. イクスクル・フォン・ヒルデンバント男爵夫人の肖像 Портрет баронессы В.И.Икскуль фон Гильденбандт》⁸⁵に戻っており、ソ連時代のタイトルから発表当時の表現に回帰している。

ここまで述べたように、ソ連時代の展示や研究ではレーピンと貴族の交流は無視され、レーピンが描いた貴族の肖像画《イクスクルの肖像》の評価は低められた。しかし実際にはレーピンはイクスクルのサロンに通い、彼女に魅力を感じ、周囲の人間よりも深くイクスクルを理解して肖像画における新たな女性表現に挑戦したのであり、彼等の関係は画家とモデルという枠に収まるものではなかった。イクスクルとの交流は《イクスクルの肖像》やサロンの客を描いたスケッチ連作、イクスクルの本の挿絵をもたらし、1880年代末から1900年頃のレーピンの創作活動に少なからぬ影響を与えた。

肖像画そのものに目を向ければ、絵画では文学のような新しい女性像の創造がみられなかったという溝渕園子の指摘⁸⁶に反して、《イクスクルの肖像》は個人の特徴を表す肖像画でありながら、当時の社会状況や新しい女性像を映し出す稀有な作品である。自分の生き方を美しく服装に反映させようとするイクスクルの試みは、レーピンが長年持ち続けていた女性の服装への関心もあって、強烈な視覚的印象によってイクスクルという人間の存在感を伝え、彼女が生きた社会のあり方を示している。

注

- 1 こうした見方は A.I. ゴートフ『ロシア美術史』（石黒寛・浜田靖子訳、美術出版社、1976年）などにみられる。
- 2 レーピンと「体制側」である皇帝・貴族との関係は、David Jackson, *The Russian vision: The Art of Ilya Repin* (Schoten: BAI, 2006) がレーピンによる皇帝の肖像を紹介するに留まる。
- 3 Государственная Третьяковская Галерея. Каталог собрания. Живопись. Второй половины XIX

века. Т.4, Кн.2. М.: Красная площадь, 2006.

- 4 *Стернин Г.Ю.* Илья Репин. Л.: Аврора, 1985.
 - 5 『国立トレチャコフ美術館所蔵 レーピン展』(Bunkamura ザ・ミュージアム、浜松市美術館、姫路市立美術館、神奈川県立近代美術館、2012-2013年) アートインプレッション、2012年
 - 6 Elizabeth Kridl Valkenier, *Ilya Repin and the World of Russian Art.* (New York: Columbia University Press, 1990), p.129.
 - 7 溝淵園子 「後期ロシア・リアリズム絵画における女性像——1870-90年代前半「移動展派」の絵画を例として——」 [『スラヴィана』18号 (スラヴィアーナ編集委員会、2003年)]、9ページ
 - 8 *Жиркевич А.В.* Встречи с Репиным. //Художественное наследство. Репин. Т.2. М.-Л.: Издательство Академии Наук СССР, 1949. С.133.
 - 9 移動展覧会協会 (Товарищество передвижных художественных выставок) が1870年から20世紀初頭にかけて年に1回の間隔で開催した巡回式の展覧会。以下、展覧会を指す場合は移動展、団体を指す場合は移動派と略す。
 - 10 Государственная Третьяковская Галерея. Каталог собрания. Живопись. Второй половины XIX века. Т.4, Кн.2. С.236.
 - 11 Товарищество передвижных художественных выставок. Письма, документы. 1869-1899 гг. М.: Искусство, 1987. С.629.
 - 12 Письма И.Е. Репина. Переписка с П.М. Третьяковым. 1873-1898. М.-Л.: Искусство, 1946. С.143-144.
 - 13 *Соловьевъ М.* Петербургскія художественныя новости.// Московскія вѣдомости, 16 Февраля 1890. №46. С.4.
 - 14 Там же. С.4.
 - 15 Выставка передвижниковъ.// Петербургская газета, 13 Февраля 1890. №42. С.2.
 - 16 ジルケーヴィチは1890年3月10日の日記の中で、レーピンから聞いた話として、イクスкулがこの肖像画に感動した知人から多くの手紙を受け取り、レーピンに皇后の肖像画を描くことを勧めたが、レーピンは責任が重く難しい仕事であるとして断ったと書いている。(Жиркевич А.В. Встречи с Репиным. С.142.) レーピンによる皇后の肖像画は現在も知られておらず、この時の辞退の理由はおそらくレーピンの本心であろう。イクスкулの提案が実現していれば、《イクスкулの肖像》を契機にしてもう一枚の肖像画の大作が生まれていたと考えられる。
 - 17 Михаил Васильевич Нестеров (1862-1942) 象徴主義の画家で移動派にも参加した。
 - 18 *Нестеров М.В.* Давние дни. Встречи и воспоминания. М.: Искусство, 1959. С.178.
 - 19 レーピンの他にネステロフがイクスкулの肖像画習作を描き (*Нестеров М.В.* Из рисем. Л.: Искусство, 1968. С.298.)、レーピンに師事していたヴァレンティン・アレксандロヴィチ・セロフもイクスкулの肖像を描いていた (*Нестеров М.В.* Давние дни. Встречи и воспоминания. С.180.) もの、これらは現存しない。ネステロフとセロフによるイクスкулの肖像画の存在はレーピンの家博物館「ペナティ」キュレーターのタチヤナ・ペトロヴナ・ボロディナ氏にご教示いただいた。
- ステルニンは、ハリコフ美術館に1点(制作年が不明)、トレチャコフ美術館に3点(1889年制作)あるとするが、所蔵館が公開している所蔵作品情報でイクスкулのスケッチの情

- 報は確認できない。(Стернин Г.Ю. Илья Репин. С.268.) トレチャコフ美術館のカタログは、1905年の展覧会に出品され1907年に700ルーブルで売られたイクスクルの肖像があったとしているが、その肖像画は現在発見されていない。(Государственная Третьяковская Галерея. Каталог собрания. Живопись. Второй половины XIX века. Т.4, Кн.2. С.236.) また『レーピン・スターソフ書簡集』の注は1925年に描かれたイクスクルの背面ヌードの油彩習作に言及しているが、現在の所在は不明である。(Письма И.Е. Репина. И.Е. Репин и В.В. Стасов. Переписка. Т.2. М.-Л.: Искусство, 1949. С.379.)
- 21 *Бокова В.* Баронесса Икскуль.// Лица: Биографический альманах. Т.4. М.: Феникс, 1991. С.95-123.
 - 22 生没年については Российское зарубежье во Франции 1919-2000. Ред. Мнухин Л., Аврилль М., Лосский В., М.: Наука, Дом-музей Марины Цветаевой, 2008. が最も詳しく、1850年11月29日生まれとしている。しかしボコワによる前掲の伝記 Баронесса Икскуль. では1852年としており、資料により異なる。
 - 23 ボコワはイクスクルの外見をロマに似ていると評し、その外見を母方の南方系(ウクライナ、セルビア)の血筋によるものだと推測している。(Бокова В. Баронесса Икскуль. С.96.)
 - 24 G.I. プリプリスカヤは1890年代のイクスクルのサロンをペテルブルクで最も人気のあるサロンとしている(Прибульская Г.И. Репин в Петербурге. Л.: Лениздат, 1970. С.235.)
 - 25 同時代の画家ネステロフによると、アレクサンドル2世の改革により開設された女子医学課程は、アレクサンドル2世が過激派ナロードニキに暗殺され、続くアレクサンドル3世(在位1881-1894)が反動的な政策を採る中で頓挫し、1886年に閉鎖された。これに対しイクスクルは知り合いを介して皇帝の側近チェリェーヴィン將軍に接触して請願活動を行い、女子医学課程を再開させた。(Нестеров М.В. Давние дни. Встречи и воспоминания. С.179.) これは反動的政策を採ったとして知られるアレクサンドル3世の決定としては珍しく、イクスクルの政治的手腕が窺える。アレクサンドル2世およびアレクサンドル3世の時代の女子教育改革運動の展開については、橋本伸也『MINERVA 歴史叢書クロニカ2 エカテリーナの夢 ソフィアの旅 — 帝制期ロシア女子教育の社会史 —』(ミネルヴァ書房、2004年)に詳しい。
 - 26 ボコワによると、1890年代後半から看護婦学校の開設や看護婦会の監督を行い、日露戦争(1904-1905)、第1次バルカン戦争(1912-1913)、第1次世界大戦(1914-1918)に際して救護活動を行ったとされる。また、第1次バルカン戦争と第1次世界大戦ではイクスクル自ら看護婦の団体を組織して前線に赴いたとされる。(Бокова В. Баронесса Икскуль. С.102-103.)
 - 27 ボコワによると、イクスクルはアレクサンドル3世紀のマリア・フョードロヴナ、ニコライ2世皇后アレクサンドラ・フョードロヴナと懇意にしていたため彼女の家は保安課の踏み込めない領域となっており、乞われて革命家を匿ったり革命党派の文書を秘匿したとされる。(Бокова В. Баронесса Икскуль. С.100.) 革命家の支援についてはボリシェヴィキの活動家ヴラディミル・ドミトリエヴィチ・ボンチ=ブルエヴィチ(1873-1955)の証言がある。(Бонч-Бруевич В.Д. Мое первое издание. Из воспоминаний.// Звенья. Т.8. М.: Государственное издательство культурно-просветительной литературы, 1950. С.679.)
 - 28 Владимир Григорьевич Чертков (1854-1836) トルストイと親しく、彼の作品の出版を行ったほか、トルストイ運動の中心人物でもあった。
 - 29 И.Е. Репин. Письма к писателям и литературным деятелям. 1880-1929. М.: Искусство, 1950.

- C.31.
- 30 1882年9月にレーピンはペテルブルク南部ボリシヤヤ・コニュシナヤ通りの仮住まいからペテルブルク中心部にほど近いエカテリニンスキー運河（現グリボエドフ運河）近くのアパートに転居した。（*Прибульская Г.И.* Репин в Петербурге. С.286.）イクスкулも1880年代半ばにイタリヤから居を移し、このエカテリニンスキー運河のアラルチン橋の傍の家でサロンを開いた。（*Бокова В.* Баронесса Икскуль. С.97.）
- 31 И.Е. Репин. Письма к писателям и литературным деятелям. 1880-1929. С.120, 229.
- 32 Там же. С.51-52.
- 33 Там же. С.171.
- 34 *Икскуль В.И.* Иванъ Дмитриевичъ Сытинъ.// Полвѣка для книги. М.: Издательская деятельность И.Д. Сытина, 1916. С.120.
- 35 Там же С.121.
- 36 А.П. Чехов. Полное собрание сочинений и писем в тридцати томах. Письма в двенадцати томах. Т.4. М.: Наука, 1977. С.149.
- 37 Елизавета Григорьевна Мамонтова (1847-1908) 実業家サーヴァ・マールモントフの妻。レーピンは彼女の肖像画を1878年の第6回移動展に出品している。
- 38 Мария Клавдиевна Тенишева (1867-1928) 画家の支援や絵画の収集を行い、自身で絵も描いた。
- 39 *Репин И.Е.* Далекое близкое. 8-е изд. Л.: Художник РСФСР. 1982. С.384-385.
- 40 ポコワはイクスкулのサロンを訪れていた人物の名を列挙している。См. *Бокова В.* Баронесса Икскуль. С.98.
- 41 *Репин И.Е.* Письма к художникам и художественным деятелям. М.: Искусство, 1952. С.246.
- 42 Исаак Израилевич Бродский (1883-1939) 画家。美術アカデミーでレーピンに師事した。
- 43 *Репин И.Е.* Письма к художникам и художественным деятелям. С.246.
- 44 *Дульский П.* Малоизвестные работы И.Е.Репина.// Искусство. М.-Л.: ОГИЗ-ИЗОГИЗ, 1936. №1. С.62.
- 45 Государственная Третьяковская Галерея. Каталог собрания. Живопись. Второй половины XIX века. Т.4, Кн.2. С.236.
- 46 画面右下に制作時期1891年7月31日（31 июля 1891）が書かれている。
- 47 画面左下に制作時期1893年3月25日（25 марта 93.）が書かれている。
- 48 Давние дни. Встречи и воспоминания. С.181.
- 49 *Стернин Г.Ю.* Илья Репин. С.278.
- 50 Государственная Третьяковская Галерея. Каталог собрания. Живопись. Второй половины XIX века. Т.4, Кн.2. С. 236.
- 51 Товарищество передвижных художественных выставок. Письма, документы. 1869-1899 гг. С.363.
- 52 *Репин И.Е.* Далекое близкое. 8-е изд. С.384.
- 53 *Нестеров М.В.* Давние дни. Встречи и воспоминания. С.180.
- 54 Письма И.Е. Репина. Переписка с П.М. Третьяковым. 1873-1898. С.143-144.
- 55 Письма И.Е. Репина. И.Е. Репин и Л.Н. Толстой в двух книгах.Т.1. М.-Л.: Искусство, 1949. С.48.
- 56 Татьяна Львовна Толстая (1864-1950) レフ・トルストイの長女。
- 57 Письма И.Е. Репина. И.Е. Репин и Л.Н. Толстой в двух книгах. Т.1. С.52-53, 57-58.

- 58 *Кирсанова Р.М.* Костюм в русской художественной культуре 18 – первой половины 20 вв.: Опыт энциклопедии. Под ред. Т.Г. Морозовой, В.Д. Синюкова. М.: Большая Российская энциклопедия, 1995. 続くガリバルディイカの説明は同書 77～78 ページによる。ガリバルディイカについての研究は国立トレチャコフ美術館キュレーターのタチヤナ・リヴォヴナ・カルポワ氏のご教示による。
- 59 断髪し眼鏡をかけ煙草を吸い、男性に混じって高等教育を受けようとする若い女性達はニヒリストウカと称された。男性のようなニヒリストウカの格好や行動はしばしば批判を受けた。*Кирсанова Р.М.* Русский костюм и быт XVIII-XIX веков. М.: Слово, 2002. С.211.
- 60 *Кирсанова Р.М.* Костюм в русской художественной культуре 18 – первой половины 20 вв. С.78.
- 61 *Нестеров М.В.* Давние дни. Встречи и воспоминания. С.179.
- 62 Там же. С.179.
- 63 Там же. С.182.
- 64 Русский Костюм 1750-1917 в пяти выпусках. Выпуск четвертый 1870-1890. М.: Всероссийское театральное общество, 1965. С.114-115.
- 65 橋本伸也、前掲書 259 ページ
- 66 同書 305、368 ページ
- 67 Письма И.Е. Репина. И.Е. Репин и В.В. Стасов. Переписка. Т.1., 1948. С.89.
- 68 *Кирсанова Р.М.* Русский костюм и быт XVIII-XIX веков. С.213. 《女学生》の作品情報は Обухов В. Калужский областной художественный музей. М.: Белый город, 2005. による。
- 69 チェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』は新しい人間の生き方を提唱し当時の学生に広く人気を博した。それはレーピンの所属した美術アカデミーにおいても同様に、レーピンもその内容は知っていた。(イリヤ・レーピン『ヴォルガの舟ひき』(松下裕記、中公文庫、1991年)、351ページ) なお、『ヴォルガの舟ひき』はレーピンの回想録 Далекое близкое [『遠きこと近きこと』] の抄記。
- 70 溝淵園子、前掲論文 4～5 ページ
- 71 *Ляковская О.А.* Илья Ефимович Репин. М.: Искусство, 1982. С.288.
- 72 『国立トレチャコフ美術館展 忘れえぬロシア リアリズムから印象主義へ』(Bunkamura ザ・ミュージアム、岩手県立美術館、広島県立美術館、郡山市立美術館、2009年) アートインプレッション、2009年、82 ページ
- 73 Государственная Третьяковская Галерея. Каталог собрания. Живопись. Второй половины XIX века. Т.4, Кн.1. М.: Красная площадь, 2001. С.313.
- 74 レーピンは回想録の中でクラムスコイの代表作の一つに《見知らぬ女》を挙げている。(レーピン、前掲書 333 ページ)
- 75 前掲カタログ『国立トレチャコフ美術館展 忘れえぬロシア リアリズムから印象主義へ』、82 ページ
- 76 レーピン、前掲書 333 ページ
- 77 前掲カタログ『国立トレチャコフ美術館展 忘れえぬロシア リアリズムから印象主義へ』、82 ページ
- 78 同書 82 ページ。トレチャコフ美術館が《見知らぬ女》を購入したのはトレチャコフの死後(1925年)である。
- 79 柏亭の作品評については神奈川県立近代美術館学芸員の初山昌夫氏にご教示いただいた。
- 80 引用文の省略部分で柏亭は組立画の例として《トルコのスルタンに手紙を書くザポロー

ジェ・コサック》を挙げている。

- 81 石井柏亭「露西亞の近代繪畫を論ず トレチアコフ畫堂」[『歐洲美術遍路 下卷』東雲堂書店、1913年)所収][初出]「露西亞の近代繪畫を論ず トレチアコフ畫堂」『藝術 東西近古藝術之評論』第1号(1913年4月)
- 82 Товарищество передвижных художественных выставок. Письма, документы. 1869-1899 гг. С.370.
- 83 Государственная Третьяковская Галерея. Каталог выставки произведений И.Е. Репина. Редактор М.П.Крести. М.: ОГИЗ-ИЗОГИЗ, 1936. С.38.
- 84 Государственная Третьяковская Галерея. Каталог выставки произведений И.Е. Репина. С.36. 付言すると、作品タイトルからは読み取れないがトルストイも伯爵の位を持つ貴族であり、1888年の第16回移動展に肖像画が出品された際の作品タイトルは《伯爵 L.N. トルストイの肖像》(«Портрет графа Л.Н.Толстого»)であった。(Товарищество передвижных художественных выставок. Письма, документы. 1869-1899 гг. С.344.)
- 85 Государственная Третьяковская Галерея. Каталог собрания. Живопись. Второй половины XIX века. Т.4, Кн.2. С.236.
- 86 溝渕園子、前掲論文9ページ



図1 イリヤ・レーピン《V.I.イクスクル・フォン・ヒルデンバント男爵夫人の肖像》1888-1889年、油彩・カンヴァス、196.5×71.7cm、モスクワ、国立トレチャコフ美術館 [A]



図2 イクスクルの写真（撮影者不明、1904-1905年）[B]



図3 イリヤ・レーピン《V.S. ソロヴィヨフの肖像》1891年、鉛筆・紙、34.5×23.8cm、サンクトペテルブルク、II. プロツキーの家博物館 [C]



図4 イリヤ・レーピン《I.N. ポタベンコの肖像》1891年、鉛筆・紙、34.5×24.2cm、サンクトペテルブルク、II. プロツキーの家博物館 [C]



図5 イリヤ・レーピン《N.A. ヴェリヤミノフの肖像》1893年、鉛筆・紙、34.5×24.2cm、サンクトペテルブルク、II. プロツキーの家博物館 [C]



図6 イリヤ・レーピン《ワルワーラ・イワーノヴナ・イクスクル・フォン・ヒルデンバント男爵夫人のサロンでの講義のV.S. ソロヴィヨフ》1890年代、鉛筆・紙、23.2 × 33.5cm、サンクトペテルブルク、II. プロツキーの家博物館 [C]



図7 《ワルワーラ・イワーノヴナ・イクスクル・フォン・ヒルデンバント男爵夫人のサロンでの講義のV.S. ソロヴィヨフ》(部分)



図8 ニコライ・ヤロシェンコ
《女学生》1883年、油彩・カン
ヴァス、131×81cm、カルー
ガ美術館 [D]



図9 イヴァン・クラムスコイ《見知らぬ女》1883年、油彩・カンヴァ
ス、75.5×99cm、モスクワ、国立トレチャコフ美術館 [E]

図版出典

A Государственная Третьяковская Галерея. Каталог собрания. Живопись. Второй половины XIX века. Т.4, Кн.2. М.: Красная площадь, 2006.

B Благотворительность в России (<http://charity.lfond.spb.ru/sisterhood/6.html> より
転載、最終アクセス 2014 年 9 月 21 日)

C *Стернин Г.Ю.* Илья Репин. Л.: Аврора, 1985.

D Товарищество передвижных художественных выставок. Письма, документы. 1869-1899 гг. М.: Искусство, 1987.

E Государственная Третьяковская Галерея. Каталог собрания. Живопись. Второй половины XIX века. Т.4, Кн.1. М.: Красная площадь, 2001.